

# 越中万葉集

題字 中尾哲雄

2



万葉集を編纂した大伴家持は、天平十八年（七四六年）から五年間、越中の国守を務めました。当時の越中は、家持が「しなざる越」と詠んだように、奈良の都から遠く離れた鄙の地。都とは異なる風土の中で家持は多くの歌を詠みました。万葉集に残る家持の歌四七三首のうち、五年間の在任中に詠まれたものは実に二二三首にのぼります。

立山へ

降り置

けり

雪を常夏

ハ

見れども

飽かず

神やら

大伴家持

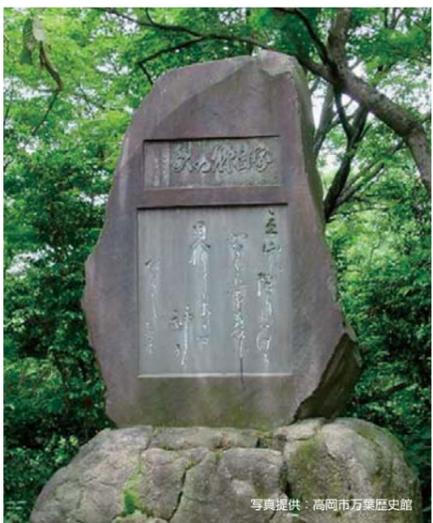
揮毫 江幡 春濤（日展会友、毎日書道展審査委員）

立山に 降り置ける雪を 常夏に

見れども飽かず 神からならし

大伴家持（巻十七・四〇〇）

【歌意】立山に降り置いている雪は、夏のいま見ても見飽きることがない。神の山だからにちがいない。



呉羽山 旧天文台登り口の歌碑  
富山県内には、万葉集歌を刻んだ歌碑が106カ所点在し、越中万葉歌碑を巡る散策コースが紹介されている。

写真・雨晴海岸から仰ぎ見る立山連峰  
雨晴海岸（富山県高岡市）から富山湾越しに、3000メートル級の山々が連なる北アルプス立山連峰を仰ぎ見る。源義経が奥州へ落ちのびる途中、にわか雨の降れるのを待ったことから「雨晴」の地名に。立山は古くから霊峰として山岳信仰の山とされてきました。万葉集には「多知夜麻」と記され、古くは「たちやま」と呼ばれていました。

著作権の関係で写真の表示ができません。  
写真閲覧を希望の方は弊社営業担当まで本誌をご請求ください。